

「御国が来ますように！！！」

～1つのパン 真のいのち パン種のたとえ～

マルコ 8:34~37

■はじめに

イソップ童話の「北風と太陽」の話を知っていますか？作者はこの話を通して何を伝えたかったのでしょうか？ある時、北風が太陽に力比べに挑み、太陽はOKします。北風と太陽の前に一人の旅人が通りかかります。旅人の服を脱がせたら勝ち、という勝負をすることにしました。北風は、どんどん強い北風を当てます。しかし、旅人は服を脱ごうとしません。次に太陽が旅人に日光を注ぎます。旅人は体が温かくなり、上着を脱いで薄着になるがあまりの暑さに途中の池で服を全部脱ぎ、水浴びをしました。勝負は太陽が勝ちました。

■ルールは何のため？

イスラエルにはモーセが作った600のルールがあります。600のルールは10個のテーマに分かれています。そしてそれは、一つの戒めにつながっています。

『そこで、イエスは彼に言われた。『心を尽くし、思いを尽くし、知力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』これがたいせつな第一の戒めです。』(マタイ 22:37-38)

これは「戒め」あり「ルール」ではありません。しかし、私たちは本当の目的を犯さないために、たくさんの予防線を張っています。(ルールの為のルール) 私達はそのルールに向かいやすく、間違っただ目線からずれないように、外側から出てくるものが人を汚すのではないと、イエスキリストは語られています。ルールによって間違っただ目線になっていないか確認をし、私達はなぜそれをやっているのかを考えなければいけません。「目線を変える」こんな話があります。ある先生の教会に大事な会議がある時に、来客が来られました。人生に困ったひとが尋ねてきたことは分かったが、その先生は心の中で「5分しかないのに。」と思いました。しかし神様に「5分もある」ということを導かれ、予定があって急いでいる中、じっくりとその人と向き合うことが出来ました。教会を訪ねて来た人は、自らで命を絶つ前に、最後のチャンスとして教会を訪れたのでした。その人は、その5分で命を絶つ決断からイエス様に出会い、永遠のいのちを得ることが出来たのです。このように目線が変わるだけで多くの人が変えられていくことはわすれてはいけません。目で見た情報で理解するのではなく、内側で感じるものとなりましょう。

■パリサイ人のパン種(マルコ 8:13-18)

パンが一つしかない議論している弟子たちに、イエス様は『パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい。』(マルコ 8:15)と言われました。パリサイ人(へ)パラシュ:「明らかに分離」という意味があります。当時パリサイ派の人たちはそれまでのやり方に問題があるという思いをそれを良い方向に変革しようとした人たちでした。しかし、その変革しようとしていた人たちが偏った目線で物事を見てしまっていたのです。イエス様はこれをパン種と言いました。変革するという素晴らしい志しがあっても自分の目線を変えず、問題を提起して、解決をするという方法を繰り返しているのでは、この二種類のパン種の話と同じようになってしまいます。そして、それを繰り返してしまう私達でもあります。特に、何かを変革する人たちは、大義のために相手を裁くという方法に陥りやすくなってしまいます。結局、裁く方法では問題を繰り返すだけになってしまいます。このパリサイ人を表す単語に使われていた「パラシュ」はレビ記の21:11-14の中にあります。「神のいのちが明らかになるまで」という意味があります。「神のいのちが明らかになるまで」自分が発している言葉、人と話している会話…。あなたは正しく言葉を使っているのでしょうか？人のことを裁いたり、悪く言ったり、人をおとしめるようなことになっていないのでしょうか？指摘する時そこにイエス様の愛はありません。それでは私たちが発する言葉で、発する人も聞く人も救われるという結果にはなりません。裁けば裁かれる結論になってしまうし、人に合わせているその行為もまた、パリサイ人と同じだと言われています。愛することもなく、変化することもなく…そのような行動を繰り返すならば、結果はただ繰り返し続けるだけになってしまうのです。

■ヘロデのパン種

創 11:4-9 にバベルの塔の話があります。「あの神のようになろう」「塔の頂に登ろう」と人が作ったものでした。それを神が降りてこれらにご覧になり、壊し、それまで人類は一つの言語であったが、その時から言語も分けられ、人々は散らされたという話です。ここで使われている(へ)ヤーラド:降りてくると言う言葉が「ヘロデ」なのです。そしてヘロデは(ギ)で「英雄」という意味です。ヘロデは悪い意味で使われています。ヘロデはローマ帝国に媚をうることで、自分の地位を得ようとしていました。ヘロデの悪巧みは降りてくる神によって壊される。現にイエスキリストによって神の計画がなされ、神の子の出現を恐れ、殺そうと企てていたヘロデの家系は3代で絶えたのです。このパン種の意味にはそのような意味があるのです。このことから、人は企てる しかし神は降りてきて壊されるということがわかります。それが十字架です。

■私たちの企て

人は企てます。しかし、冒頭にお話しした「北風と太陽」の話を、北風では人は変えられません。太陽はその人に何をしたのでしょうか？当時、裸になる=殺されるというようなものでした。しかし、その人が裸になるとは、その人は安心したからです。つまり、その人の心に平安を与えたのです。安心したから、殺される状況の中でも服を脱ぐことができたのです。北風を与えるのは恐怖でした。ルールで何かを指摘してあなたが北風では人は変わりません。もしあなたの企てが自分の為なら神は降りてきて壊されます。「自分の十字架」今していることは何のためでしょうか？しかし目的が失われているなら、その企てによって滅びに至ることになります。自分の十字架は旧約聖書ではそれを表現することはありません。しかし同じ意味で「影」という言葉があります。「影」とはロトがみ使いが来た時に隠れたという意味があります。自分を捨てる(自分が物事を理解する心)。その心は十字架です。心で思う不足は捨てることで得られます。あと5分もある→心の変化こそ十字架の力です。

■いのち

まことの「いのち」があるでしょうか？まことのいのちが心を制しているときに、私達には「いのち」があります。人は「いのち」の管理をすることはできません。「いのち」の管理者ではなく「たましい」の管理者であります。私たちの模範であるイエスキリストは「たましいの管理者」として、私の罪の為に十字架から来ました。目線がズラされ、的を外してしまう私たちの為に「彼らの罪を赦してください。」と。聖書は失われたものに対する愛の指摘です。日曜日は失われた「いのち」を買い戻す時間です。

■最後に

自分の企てはにおいて、神様の企てを聞く、そうすると自分の企ても益になります。ルールでは人は変えられません。方法では人は豊かになることはできません。頑張って北風を吹かせているか、それとも太陽になって、その人に安らぎを与えるか、その為にイエスキリストが選んだ道は十字架でした。私達は背負われています。自分の力に頼らず、神の御手に委ねましょう。方法ではなくルールではなく、私達の心を神に返しましょう。そして、イエスキリストの心を知りましょう。私達を戒める為にルールがあるわけではない、私達が正しい道に進む為にはならないルールが与えられているからです。ルールはギフトで縛るものではありません。でも私達はルールによって縛られています。大事なことは多くの事を向き合うかではない、ひとつひとつにどう向き合うか。大切なことは目線が変わる事です。自分を捨て真っ直ぐに理解しましょう。「自分の企て」を置き、「イエスキリストの企て」を聴いて下さい。心に愛が注がれますように。

(要約者:泉水 京子)

(2022年7月24日)